

## 松下幸之助記念志財団 研究助成

## 研究報告

(MS Word)

## 【氏名】

牟禮拓朗

## 【所属】(助成決定時)

一橋大学大学院社会学研究科地球社会研究専攻博士後期課程

## 【研究題目】

チュニジアの民主化「成功」要因についての研究

## 【研究の目的】(400字程度)

本研究は、今日における中東・北アフリカ地域の政情不安の元凶ともされている「アラブの春」の影響を受けた国々の中で、唯一民主化に「成功」しているチュニジアに着目し、その「成功」要因を明らかにすることを研究目的とする。2010年代初頭に中東・北アフリカの各国で生じた民主化運動「アラブの春」の後、エジプトでは独裁政権の打倒に成功するもわずか1年で軍事政権に回帰し、シリアやリビアでは深刻な内戦に陥った。近年でも、2019年にアルジェリアとスーダンで民主化運動によって相次いで独裁体制が崩壊したが、アルジェリアでは未だに旧体制色が根強く残存し、スーダンでもクーデターにより民主化は頓挫した。このように、中東・北アフリカ諸国では人々の民主化への思いが運動として度々顕在化するものの、様々な要因から「失敗」に陥る国が多い。その一方でチュニジアは、2011年の革命以降、紆余曲折あるものの中東・北アフリカ諸国で唯一、選挙による議会・大統領選出という民主主義政治が維持されているという点で同地域における特異性を有している。

## 【研究の内容・方法】(800字程度)

本研究は、革命後のチュニジア民主政治の「成功」にとっての一因として、イスラーム主義政党と世俗主義政党の協働に着目するものである。それは、イスラーム主義組織は合法化されるとリベラルな価値観に寛容になる「包摂を通じた穏健化」が一般的な論(Schwedler2006)であるのに対し、チュニジアのイスラーム主義政党であるエンナハダは権威主義体制期に一貫して政治から排除されていたものの、革命後の民主政治の中心的アクターとして世俗主義勢力と協働したという点で特異であるためである。

本研究では、1956年から2011年まで続いたチュニジアの権威主義体制期における「競合構造」の通時的変化および各勢力間の相互関係に着目することで、それらが今日のイスラーム主義勢力の世俗主義に対する寛容な姿勢と連関していることを示す。「競合構造」とは、エレン・ルスト-オカル(Lust-Okar,2005)が提唱した、支配体制の現職者による反対勢力への対応を「包摂(合法)」と「排除(非合法)」から分類したものがある。支配体制が反対勢力を一括して排除する「統一型競合構造-排除型」、一括して包括する「統一型競合構造-包摂型」、一部のみを包摂する「分断型競合構造」の3パターンがあるという。ルスト-オカルによると、(チュニジアの権威主義体制にも該当する)「分断型競合構造」は、一見すると部分的な政治の自由化にもみえるものの、実際は反対勢力間の一致団結を困難とし、逆に権威主義体制の維持に寄与することを明らかにした。本研究では、この「包摂」の範囲を、「A.(体制に)従属」「B.合法的反対勢力」「C.黙認」に、「排除」を「D.抑圧」に精緻化した分析を行った。研究の方法としては、チュニス国立図書館や受入先研究機関(OTTD)に所蔵されている当時の公文書、政治家の伝記、雑誌や新聞などのアーカイブス史資料を用い、権威主義体制期の主な反対勢力である①イスラーム主義組織、②労働組織、③人権団体との相互関係および権威主義体制との関係性の変化を辿り、今日のイスラーム主義勢力と世俗主義勢力の協働に通底していることを明らかにすることを試みた。

#### 【結論・考察】（４００字程度）

各勢力間関係および各勢力と体制間の関係について、以下のことを明らかにした。チュニジアの労働組織 UGTT と体制との関係性の通時的変化は、「包摂」の内部で生じた動きではあるが、権威主義体制の維持に寄与していた。特にベンアリ大統領の時代（1987-2011）に進められた「政治的多元主義」においても非合法状態が維持されたエンナハダは、「合法的反対勢力」にあたる UGTT と協力関係を持つようとする試みに失敗し、また労働者を動員する余地も多くなかったために活動の場が大学などに限られた。また人権団体である LTDH の事例からは、革命直後の暫定大統領にもなった LTDH 創設者マルズーキとイスラーム主義組織エンナハダのイデオログであるガンヌーンが共に弾圧を受ける中で構築された関係性に着目することで、「包摂／排除」にまたがる反対勢力間で部分的なネットワークを構築した事例を明らかにした。このように本研究からは、革命後のチュニジア民主政治の「特異性」であったイスラーム主義勢力と世俗主義勢力の協働の背景には、本来権威主義体制を強化するために体制によって恣意的に用いられた「分断型競合構造」の通時的変化および反対勢力間のネットワーク構築が大きく寄与しているという、逆説的な論理が働いている可能性が示唆された。